

「永遠の今」としての愛の本性について

—— キルケゴールと九鬼周造 ——

植 村 恒 一 郎

On the Nature of Love as “the eternal now”

—— S.Kierkegaard and Kuki Shuzo ——

Tsuneichiro UEMURA

私はあなたの妻になります。忠実で従順な妻に。

でも愛は無理、どうしようもないの。(泣く)

生れてから一度も私、人を愛したことがない!⁽¹⁾

(チェホフ 『三人姉妹』)

序

『三人姉妹』の終幕近く、三女イリーナのこの科白は、近代演劇において発話された科白の中でも最高の一つといえるだろう。なぜなら、イプセンからテネシー・ウィリアムズに至るまで、近代演劇が繰り返し描いてきたのは、愛が成就せずに苦しむ人間の姿だからである。いや、愛という主題は、近代演劇だけではない。ソフォクレス『アンティゴネ』のもっとも心に残る科白は、アンティゴネが王クレオンに向かって叫ぶ「私は、ともに憎しみ合うためではなく、ともに愛するべく、この世に生まれてきました」であるし、シェイクスピア『リア王』のもっとも衝撃的な科白は、冒頭の直後、コーディリアの独白、「コーディリアは何と言えがいい？ ただ愛して、黙っていよう [(*aside*) What shall Cordelia speak? Love, and be silent.]」である。愛の喪失、あるいは愛が成就しないことに、なぜ人はこれほど苦しむのだろうか。それはおそらく、この世に生まれた人間にとって、愛はもっとも貴重なものであるにもかかわらず、それは不可能とまではいえないが、非常に得難いものだからであろう。では、なぜそうなのか？ それが本稿の主題である。

結論を先取りして言えば、愛がきわめて貴重なものである理由は、それが真の愛であるならば、そこに「永遠の今」が現出しているからであり、また、愛は、「我と汝」が互いに向き合って生成する自己性の最高の在り方だからである。しかし、愛を概念的に正確に把握することは難しい。プラトン『饗宴』、デカルト『情念論』、フョイエルバッハ『キリスト教の本質』、キルケゴール『反復』『あれか、これか』、九鬼周造『「いき」の構造』、ラカン『アンコール』など、哲学者たちはこれまで繰り返し愛について語ってきたが、それは直接に愛を概念化するというよりはむしろ、神話、感情、宗教、文化、精神分析などを媒介にしながら愛を概念化しようとした。本稿もまず初めに、愛の「表象」を手に入れるために、「愛」の核心である「恋」について、日本の詩である短歌を少し引用してみたい。

まず、恋の時間性についてみてみよう。「誰かを好きになる」というのは受動的感情なので、恋は、気が付いてみれば好きになっていたという現在完了形で始まり、いつ恋が始まったのか、その始まりを現在として体験することはできない。

- (1) かがみ込み数式を解く君が背の縫ひ目のほつれ見てをり我は (栗木京子「二十歳の譜」1974)

作者は京大理学部生物学科学生、彼は数学科学生。おそらく恋はもう始まっているが、作者がそう自覚しているかどうかは分らない。もちろん彼は何も知らない。

- (2) かたちなき思慕分かちては暗室に分光器 (プリズム) のぞく瞳と瞳 (同)
- (3) トルソーの静寂を恋ふという君の傍辺 (かたへ) に生ある我の坐らな (同)

自分が相手を好きになったからといって、相手も自分が好きであるとは限らない。まったく同時に相思相愛になることはほとんどなく、しばらくは一方だけの感情である。

- (4) 観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生 (同)

これは高校の国語の教科書にも載った有名な歌であるが、作者は彼と一緒に遊園地で観覧車に乗った。「今日、あなたと一緒にいるこの時間は、あなたにとってはたった一日のことかもしれないけれど、私にはこれが人生のすべてなのです!」。ここには、恋における「永遠の今」が現出している。

- (5) あの夏の数かぎりなきそしてまたたつた一つの表情をせよ (小野茂樹『羊雲離散』1968)

これも(4)と並んで、恋の名歌として名高いが、ここにも「永遠の今」が現出している。あとで考察するが、キルケゴールは恋に、「追憶」の恋と「反復(取戻し)」の恋を区別し、「追憶」とは終わってしまった恋、「反復」とは現在形の恋であり、そこに「永遠の今」が現出していると言う。この歌もまた、彼女の「数限りなき表情」が「たつた一つの表情」として反復される(取り戻される)「永遠の今」である。

- (6) はじめなき夢を夢ともしらずしてこの終わりにや覚めはてぬべき

(式子内親王『家集』、「夢はいつのまにか始まっているので、その始まりは分からない、私のこの人生も、夢とは知らずに夢を見ているみたいだけれど、この人生が終わったとき、はたして夢から覚めるのかしら」)

夢もまた恋と同じく、いつ始まったのか分からない。夢の終わりは醒めることで現在形として体験できるが、夢の始まりは現在形として体験できない。だから、夢と恋は似ている。

- (7) あはれとも言はざらめやと思ひつつ我のみ知りし世を恋ふるかな

(式子内親王『家集』、「もし私が貴方に告白したら、貴方も私のことを好きって言わないかしら、もちろん言うわよね……と、空想を楽しみながら、私はとうとう貴方に告白しないまま長い時間が過ぎてしまった、でもそれは私だけの楽しい時間だった」)

(8) 忘れてはうち嘆かるる夕べかな我のみ知りて過ぐる月日を

(式子内親王『新古今』、「こんなに長い間貴方を愛し続けてきた私の気持ちを、貴方には一度も打ち明けていなかった、そのことをつい忘れ、今夜はきっと貴方がいらっしやると期待してしまった、ああ、なんて悲しい夜」)

(9) 恋ひ恋ひてそなたになびく煙あらば言ひし契りのはてとながめよ

(式子内親王『新後撰和歌集』、「もしも貴方の方へ、恋い焦がれるように流れてくる煙があったならば、それは私よ、死んで、焼かれて、煙になってしまったけれど、貴方を愛していますと誓ったあの私よ」)

これら式子の恋は、「我のみ知りて」とあるように、相思相愛の恋ではない。だが、(4)と同じく、「あなたはまだ私の愛を知らないかもしれないけれど、私にとっては、この愛が、私の人生のすべて」と言っている。つまり「永遠の今」が現出している。

ここで「永遠の今」について簡単にコメントすると、「永遠」とは、たとえば「一億年以上」のように持続する長い時間のことではない。私の人生の全体が「永遠」である。なぜなら、私の人生は両側を「無」に挟まれているからである。「過去」とは私が生れる前の無を意味し、「現在」とは私が生れてから死ぬまでの間のこと、「未来」とは私の死後の無だからである。40歳で死んだ人と70歳で死んだ人を比べれば、後者の人生の方が長く感じるかもしれない。だが、他人との比較ではなく、自分の人生だけを考えると、両側を無に挟まれている自分の人生は、無との関係においては、持続に「より長い／短い」はない。「長い／短い」とは、ある持続を他の持続と比べているのであり、ある持続だけを無と関係させるならば「長い／短い」は存在しない。自分の死によって「死後の無が始まる」のではない。それはまだ「無」を「持続」とみなす錯覚である。「無」はどこかで始まるようなものではない。だから「無が始まるそこ」が見えることはない。ということは、「私という存在が終るそこ」もまた見えることはない。私の人生は、「無」との関係においてはつねに無限であり、「そこで終る」ような「そこ」、つまり「端」が見えることはない。つまり自分の人生は、「端が見えない」という意味で「永遠」なのである。これは、他者との比較ではなく自分の人生だけを考える場合、誰にとっても同様に成り立つことである。西田幾多郎は、『善の研究』において、アウグスティヌスの時間論に触れた箇所でもこう述べている、「神には過去も未来もない、……神に於ては凡てが現在である。……神は永遠の今に於てある」⁽²⁾。だが、人間の場合についても、自分の一生の内部ならば過去も未来も存在するが（「昨日」や「明日」）、自分の一生の外部には過去も未来も存在しない。なぜなら生まれる前と死後は「無」だからである。つまり、神だけでなく人間もまた、人生の全体を考える限り「凡てが現在」であり、つまり永遠を生きるのである。そして「永遠の今」とは、自分の人生の全体が、ただ端が見えないだけでなく、「この今」に凝縮されて意識され、そこに輝く「今」のことである。（以上は、エピクロスの「死は存在しない」を私なりに言い換えたものである）

しかし、愛には自分だけでなく他者も関わっている。愛には自分が他者と一体になりたいという深い欲求が含まれている。だが、私たちは他者に無限に接近することはできるが、他者と一体になることはできない。愛には、他者性としての他者性がどこまでも残る。その他者性の必然にどう向き合えばよいのか。これが九鬼周造の言う「いき」である。

(10) 君かへす朝しきいしの舗石さくさくと雪よ林檎の香のごとくふれ

(北原白秋『桐の花』1913、この歌は、「君」との後朝の朝を詠んだ「いき」な歌である。だが「君」は隣家の人妻であり、二人は姦通罪で夫に告訴され、二週間拘置された。そしてその後、白秋は彼女と結婚する)

恋は、式子内親王の「忍ぶ恋」や栗木京子の歌で分るように、一人の愛の感情においてだけでも成立し、「永遠の今」が現出している。しかし、白秋の歌のように、相思相愛になれば、恋は、他者性を自己に内面化する様相が異なってくる。つまり、片思いから相思相愛になると、他者性との緊張の様態が変化する。

以上のように、恋は、(1)受動的感情としてのエロス、(2)現在性、(3)他者性を内面化する自己生成、の三つの要素から成り立っている。以下、順に考察しよう。

1 受動的感情としてのエロス

「愛」について、もっとも完全に近い形で述べたのは、まずはプラトン『饗宴』である。その要点は次のようになる。

>わたしたちは、愛のなかから、ある一つの姿を取り出し、それに全体の名を与えて、それを愛(エロス)と呼びます。……愛とは、善きものが、永久にわが身の目的になることを目的としています。……愛の行為とは、美しいものにおいて、子を産むことです。(『饗宴』205b～206b、森進一訳、新潮文庫)

ここでは、「愛(エロス)」の不可欠の契機として、「善きもの」「永久(永遠)」「美」「子を産む(生殖)」などが挙げられている。では、愛はなぜ「美しいものにおいて子を産む」ことを目的としているのか。プラトンは神話に訴え、男と女は太古は合体した一つの身体であったが、それが二つに分割されたために、互いに本来の姿に戻ろうと片割れ同士が相手を求めるからだと言う。これはたしかに神話であるが、今日では、人の子は、父と母から半分づつ受け継いだ遺伝子から成り立つことが分かっているから、「片割れ」の神話はある意味で事実と合致しているともいえる。

>人間の本来の姿が二つに切断されると、その半身は、皆みずからの半身を焦がれており……その完全なる全体を欲求する。その欲求にこそ、愛という名がさずけられている。……人間相互の愛というものは……、二つの半身から、一つの完全体をつくり、人間本来の姿を癒さんとする。(『饗宴』191a～192e)

では、愛が「みずからの半身を焦がれる」とは、どのようなプロセスなのだろうか。それはまず、自分の半身である相手の身体を視るという出会いによってである。その出会いによって、我々のうちには、相手を焦がれる愛の感情が生じる。このプロセスを考察するために、ピーパーとデカルトを参照してみよう。

ドイツのカトリック哲学者ヨゼフ・ピーパー1904～97は、プロテスタント系の哲学者たちがエロスとアガペーを対立的に捉えるのに対して、両者を連続的に捉えた人として知られる。彼の『愛に

ついて』(原著1972、稲垣良典訳1974、エンデルレ書店)では、「愛とは、われわれのもとにやってきて、いわば魔法のようにふりかかるものである」(邦訳 p.26、以下同様)とされている。つまり、愛は何よりもまず、受動的な経験、受動的な感情なのだ。われわれは「私はあなたを愛する Ich liebe dich」と言い、「愛する」という他動詞があるので、愛を、志向的経験、意志、行為などと考えてしまう。しかし、志向や意志や行為の前に、「誰かに魅せられる」という「魔法のようにふりかかる」受動的感情がまず存在するからこそ、そこから「愛する」という志向、意志、行為が生れるのである。ピーパーは次のように言う。

>英語の「be fond of (……が大好き)」「fondness (愛情)」の fond とは、本来、(魔術にかかった、魔法で変えられた) というほどの意味であり、……「一種の魅了されたさま」を意味する。ここには、愛というものに含まれている受動的 성격が明らかである。愛するとき、われわれは自ら活動し、能動的であるというよりは、むしろ愛にあたいするものによって動かされ、変容せしめられるのではないか、つまり、「始動せしめられる」のではないか？ 愛とはなによりも、愛されるものに夢中になること、愛されるものに魅了されることではないのか？……これは、ラテン語の affectio でもって言いあらわされていたことの書き換え、つまり「魅せられてあること」にほかならない。(p.22f.)

愛とは、まずは「愛する」のような能動形ではなく、「相手に魅せられた！」という受動的経験であり、自分の中に相手へのそのような感情が生じることは、自分が意図したことではなく、相手から贈られたもの、相手から恩寵のように与えられたものである。ピーパーは、この「相手に魅せられる」という経験を表わすロシア語についても注意を喚起する。

>ロシア語には、「目で愛する mit den Augen lieben」(= ljubovatsja) という言葉がある。つまり、視ることにおいて実現されるところの愛である。あるものがそれあるがゆえにそもそも愛の対象となるところの特質とは、美である。アウグスティヌスにも、「美しいものだけが愛される」「われわれは美しいものだけしか愛しえない」(『告白』『音楽論]) という言葉がある。あるいは、「美とは視るに悦ばしきものなり pulchrum est quod visu placet」という古代の定義もあり、このような同調的な熟視 — それはいまだ〈所有〉への意志をまったく含まない — がなければ、真の愛というものはありえないことになる。(p.24)

近代哲学の祖デカルトは、『情念論』(1649)において、「愛 amour」について論じている。ここでは「情念 les passions」という言葉が使われているが、それは情念そのものが「受動的 passif」であるがゆえに付けられた名である。デカルトによれば、まず6つの基本情念が存在する (§69)。それは「驚き」「愛」「憎しみ」「欲望」「喜び」「悲しみ」である。それ以外の情念は6つの基本情念の派生態として説明される。

「驚き」というのは、われわれの感覚や知覚に何か新しいものが現れることである。テーブルの上においしそうなケーキを見つければ、「おっ……、いいな」と感じる。これが「驚き」と「愛」である。冷蔵庫に腐ったチーズを見つければ、「あっ……、嫌だな」と感じる。これが「驚き」と「憎しみ」である。つぎに、「そのケーキを食べよう」と感じたり、「そのチーズを捨てよう」と感じるのが「欲望」である。そしてそのケーキを食べて、美味しければ「喜び」が、不味ければ「悲しみ」を感じる。あるいは、チーズを捨てて冷蔵庫がきれいになれば「喜び」を、チーズが冷蔵庫

にこびりついて取れなければ「悲しみ」を感じる。このように、われわれを行為に導く端緒は感情であり、そして行為とは、何らかのよきもの(=善)を得て、わるいもの(=悪)を退けることである。そして行為が達成される満足／達成されない不満足が、「喜び」／「悲しみ」である。このように、われわれの生活はすべて、感情 → 行為 → 感情というサイクルから成り立っている。行為において、AにしようかBにしようかと迷い、どちらがよいかを考えてから選択することはもちろんある。この場合は思考や知性も働いているが、その場合でも最終的には、Aの方が「いいな」とか、Bは「嫌だな」と感じるからそちらを選ぶのだから、やはり感情が行為を導いている。人に対して感じる「愛」も、まずは「驚き」の次にくる感情であり、デカルトは次のように述べている(野田又夫訳、谷川多佳子訳より)。

> さて愛にしても憎しみにしても、その対象が……われわれの本性に適合しているとか、あるいはそれに反しているとか、われわれの内的感覚または理性が判断するものを、それぞれ「善」または「悪」と呼んでおり、われわれの外的感覚によってわれわれの本性に対する適不適が示されるものを、「美」または「醜」と呼んでいる。そしてその場合、外的感覚とは主として視覚をさすのであって、視覚だけで他の感覚のすべてを合せたもの以上の重要性をもつ。以上のことから、二種の愛が生じる。善いものへの愛と、美しいものへの愛である。後者を「快 agrément」と名づけることができる。前者の愛とも、よく愛の名を与えられる「欲望」とも、混同しないためである。(§85)

> 「快」は、好ましいものの享受を、人間に属する善のうち最大の善として示すために自然が特に設けたものだ。ゆえに、ひとはこれを享受したいととても熱く欲する。……ひとはある年齢とある時期に達すると、自分を不完全なものに見なし、自分是一个の全体の半分にすぎず、異性のもう一人が残りの半分であらねばならないかのごとく考える。こうして自然によって、このあと半分の獲得が、ありとあらゆる善のうちで最大のものとして漠然と示される。ひとは異性の人たちを多数見るからといって、同時にその多くを望んだりはしない。……むしろ、ある一人の人間において、同じときに他の人において認めるものよりいっそう自分の好む何かを認めると、精神はそのただ一人の人間に対して、所有しうる最大の善として追求しようとする。……このように快から生まれるこの傾向、この欲望は、前述の愛の情念よりもっとふつうに、恋の名で呼ばれている。この恋はまた、いっそう不可思議な効果を持ち、物語作者や詩人たちに主要な題材を供している。(§90)

ピーパーと同じく、デカルトは「美しいものへの愛」は主として視覚から生じると述べており、それを「快」と呼んでいる。この「快 agrément」という語は「魅力」「愛嬌」などの意味もある。そして、われわれは第二次性徴の年頃になると、異性のうちにこの「美」を発見し、それをこの世で最大の善として激しく欲し、追求する。デカルトは、「美」と「愛」との根源的な結びつきを、このように明確に語っている。

2 愛の現在性

愛は何よりもまず受動的感情である。愛の感情は自分で意志して引き起こすことはできない。だが、愛それ自体は受動的感情でありながら、それは自分の身体の動きを動機づける。デカルトにおいて、外界の新しいものに出会ったときに生じる「驚き」の感情に続いて、「愛／憎しみ」の感情

が生じるのはなぜだろうか。それは外界の新しいものに出会ったとき、我々は直ちに、その新しいものに対して取る態度を決めなければならないからだ。それに近づくか、それから離れるか、そのまま動かないかを、決めなければならない。その態度を動機づけるのが「愛／憎しみ」の感情であり、我々の普通の言葉で言えば「好き／嫌い」の感情である。夏の暑い日差しの下で喉が渇いた時、思わぬところに自販機を見つければ、「おっ」と驚き、「あっ、これがいい」と好きな茶を選び、買って飲むだろう。これが、驚き→好き→行為というサイクルであり、我々の日々の生活はこれから成り立っている。ということは、我々の人生もまた、このサイクルから成り立っていることになる。我々の生のほとんどは、個体の一日ごとの再生産の繰返し、つまり朝起きて働き、夜寝て、また翌朝起きて働く、という繰返しだが、その中には種の再生産も含まれており、それもまた生の一部である。それはストレートに表現すれば、生殖、すなわち子を産んで育てるという営みである。個人のレベルでは生殖はすべての人が行うわけではなく（個体の再生産とはそこが違う）、またその必要もないが、ヒトという種を全体として見れば、ヒトの生に生殖が不可欠に含まれることは疑いない。このように考えると、デカルトの言う「愛」は、まずは個体の再生産への行為を動機づける広義の「好き」であり、その中に、種の再生産である生殖を動機づける狭義の「愛」が含まれていることが分る。「愛」は受動的感情であるが、それは生殖を動機づけることを、その本性としてしている。

では、愛の本性がそのようなものだとすると、なぜ愛は「永遠の今」と関わりがあるのだろうか？ それには愛のもつ時間構造、愛の時間性を考察しなければならない。「永遠の今」に含まれる「今」、つまり「現在」とは何だろうか？ もし愛が、他のものに優越して現在と関わりを持つ何かであるとすれば、それはなぜなのか？ まず、「現在」という時間の本性を考察しよう。そもそも時間とは、それ自体で実在するものではなく、実在するのは運動や変化であり、その中からある関係性を取り出したものが時間である。過去、現在、未来という時間は、一つの個体としての生命体（＝自然的運動体）である我々が、個体の外部に対してどのように運動しているか、その運動を個体の視点から捉えた関係性を抽出した時間である。具体的には、「現在」とは、個体としての私たち一人一人が、外界と接触するその接触面のことである。「過去」とは「その接触がもうなくなったこと」、「未来」とは「接触がまだ起きていないこと」である（ただし自分の生まれる前と死後は、「無」であるからそもそも接触が存在しない）。「現在」が個体の外界との接触面であることは、「現在」を「現前」と言い換えてみればよくわかる。英語でも「present」は「現在の」という意味と同時に、「現前している」「居合わせている」という意味がある。「現在」が個体と外界の接触面であるとすれば、その接触にも程度があるはずである。カントは人間の感覚には「度 Grad」があると考えた。つまり、外界との接触には、強いから弱いまで、あるいは濃いから薄いまで程度がある、と。「現在」の本性が外界との接触にあるとすれば、「現在」においても、強い接触／弱い接触、濃い接触／薄い接触など、接触にグラデーションがあるはずである。弱い接触であれば、その両側に過去と未来が「斜めに見える」だろう（F. プレンターノ）。たとえば、落雷の音のような強い接触では「現在」しか感じられず「現在」が突出しているが、音楽のメロディーを聞く場合ならば、今鳴っている音だけでなく、両側に前後の音が聞こえてメロディーが形成されるだろう。つまり、メロディーは「過去」や「未来」とも共存する「現在」である。このように「現在」に接触の強弱があることが、「永遠の今」という特別な「現在」を創り出していると考えられる。

「永遠」とは、前に述べたように、それ自体で存在する時間の長さではない。時間はそれ自体で存在するものではなく、運動や変化に即してしか存在しない。だから「永遠の今」についても、自体

的に存在する時間としての「永遠」や「今」ではなく、生命体としての人間の生という運動に即した「永遠の今」でなければならない。なぜなら、「今」という時間は、あくまで運動する個体としての私たち一人一人が、外界と接触するその接触面であり、正確には、「今」という時間が単独で存在するのではなく、「今・ここ」という内容を含む時空結合体として存在するからである。そのような「今」が自分の人生の全体とびったり重るように感じられるくらい強く他者に接触するのが「永遠の今」である。最初に見た栗木京子の歌「観覧車回れよ回れ想ひ出は君には一日我には一生」において、彼女のこの「今」は彼女の人生の全体と重なっている。では、愛においては、なぜこれほどまでに「今」という現在性が重みをもつのだろうか？ その理由を考えてみよう。

まず愛という感情を他の感情と比べてみると、その現在性の強さが分る。愛は、自分の意志では生じないという意味で受動的感情であるとともに、「この人が好きだ！」という対象をもつ志向的感情でもある。愛は、「この人」の現前から自分に贈られる感情、それは「この人」の美しさ、あるいは性的魅力が自分に引き起こす感情である。つまり何よりもその人の美しさや性的魅力が「今・ここ」にあること、その現前性に負う感情である。そのことは、デカルトが「愛」と並べた「憎しみ」と比べてみるとはっきりする。ある人が自分の目の前に現われたとき、「憎しみ」を感じることもあるだろう。それは、過去にその人が自分や他人に何か嫌なことをしたからである。あるいは、その人が目の前に現れたとき、「憎しみ」にすぐ続いて「恐れ」を感じることもあるだろう。それは「その人はこれから自分に何か危害を加えるかもしれない」という恐れである。つまり、「憎しみ」や「恐れ」は、過去や未来に負う感情であり、愛の感情が相手の現前性そのものに負うのと異なっている。キルケゴールは『反復』において、自分のレギーネへの愛が「追憶」になってしまい「反復（取戻し）」ではないことを嘆き、それが婚約破棄の理由の一つになっている⁽³⁾。「追憶」の愛とは、もう終わってしまった愛であるのに対し、「反復（取戻し）」の愛は現在性そのものの愛である。そしてキルケゴールは『不安の概念』における長い註で、次のように述べている。「反復は、超越的であり、……永遠が真の反復である。……反復は単に観想のためのものでなく、それは自由の課題であること、それは自由そのものを、意識の二乗を意味する、……真の反復は永遠である」（梶田啓三郎訳）⁽⁴⁾。そう、「永遠の今」とはまさに「自由そのもの、意識の二乗」に他ならない。

愛がきわめて現在性の強い感情であること、場合によっては「永遠の今」が現出するほど強い現在性であることには、さらに理由がある。それは愛が生殖を動機づける感情であること、そして生殖は私たち一人一人の命をこの世に創造すること、つまり生殖はヒトが存在するための存在論的基礎だからである。このことは、エロスとしての愛が基本的に青年期のものであることから分かる。第二次性徴以前の子供にはエロスの愛は現実化しない。一生の全体の中で捉えるならば、生殖にもっとも適切な年齢である17,8歳から30代半ばくらいまでが、男女ともに肉体がもっとも美しいときであろう。それは、肉体の美は生殖を動機づけるためのものだからである。「現在」とは、運動する生命体としての個体が外界と接触する接触面を個体の視点から捉えたものであった。我々の人生は、次々に新しいものと出会い、新しい接触面＝「現在」が次々に交替する一連の経過である。それはデカルト的に言えば、驚き→好き/嫌い→行為という、知覚→感情→行為の一連であり、それが我々の人生のすべてである。我々は自分の人生において、たくさんの人と出会う。進学、就職、転職などが、自分の人生の重要な契機であるのは、それが、自分は誰と出会うのか、誰と一緒に毎日過ごすのか、誰と一緒に生きるのかの選択だからである。その選択の重みに応じて、その決断の「今」はそれぞれ、人生において突出した「今」になるだろう。それに対して、学生食堂で

Aランチを選ぶかBランチを選ぶかは、それぞれ決断の「今」があるが、それほど人生において突出した「今」にはならない。このような人生の全体において、「今」の重要性はそれぞれに異なるが、そうした視点から見ると、将来の可能的配偶者を決める「今」は、非常に重量度の高い「今」ではないだろうか？ そしてそれを決めるのが愛ではないだろうか？ もちろん、ドン・ファンのように恋愛だけで結婚せずに一生を送りたいという人もいるから、この「可能的配偶者」は、子どもを作らないという前提の恋愛関係も含むだろう。恋愛が結婚とどのように関係すべきかは、キルケゴールが大著『あれか、これか』(1843)で論じた主題であるが(「あれか、これか」の含意は「恋愛か、結婚か」という選択である)、これについては次節で触れたい。いずれにしても、将来の可能的配偶者を決める愛の感情と決断が、人生において突出した「今」であることは疑いないだろう。

3 初恋は同時に結婚である(キルケゴール)

キルケゴールの大著『あれか、これか』の中の一論考「結婚の美的妥当性」は、恋愛が詩的であり、美しいものであるのに対して、結婚は散文的であり、美的とは言えないと一般に考えられているのに対し、いや、結婚も恋愛と同様に美的でありうる、と主張したものである。たしかに「結婚は人生の墓場である」という格言もあり、モンテーニュなども、恋愛がもっとも素晴らしい男女の関係であって、結婚はそうではないと考えている(『エッセー』第3巻第5章「ウェルギリウスの詩句について」)。バイロンも「愛は天国のもの、結婚は地獄のもの」と言ったといわれている⁶⁾。しかしキルケゴールによれば、美的生き方は倫理的生き方と統一されなければならない。性的魅力であるエロスの愛によって生殖が動機づけられ、子どもが生まれてくるが、それで愛の役割は終わるわけではない。赤ん坊を一人前の大人に育てるためには子に対する親の愛が必要であり、子どもから成人へと成長させるためには、さらに家族、親戚、近隣、友人との良い関係すなわち友愛や隣人愛が、要するにアガペーとしての愛が必要である。生殖を動機づけるエロスの愛はそれだけでは生殖を完成できず、アガペーと統一されなければ、「一人の人間をこの世に送り出す」という生殖の本義を完遂することができない。キルケゴールが恋愛と結婚とを、美的生き方と倫理的生き方とを統一させるのは、そういうことである。

キルケゴールは、人は一生に一度しか恋をしないという。つまり恋愛は必ず「初恋」であり、初恋は必ず結婚になるから、一度しかない。もちろん離婚や再婚は許されない。これは我々の経験的事実とは異なるが、初恋に含まれる幻想的な「永遠の今」が、真理としての「永遠の今」に昇華されるのが結婚なのである。「愛はただ一度。その愛は結婚において現実となる」(88頁、以下、引用はすべて『結婚の美的妥当性』の頁数)。キルケゴールによれば、「結婚」は、神が二人を結びつけるのだから、厳密にはキリスト教だけのものであり、ギリシア的異教やユダヤ教、東洋などのそれは「結婚」ではない(42頁)。これは、「美的生き方」としての「恋愛」は同時に「倫理的生き方」としての「結婚」であり、それがさらに「宗教的生き方」に止揚されるべきとするキルケゴールからすれば、当然の帰結でもある。だが、それでは「結婚」があまりにも狭義になるので、本稿の考察では「結婚＝夫婦になること」と定義しておこう。もちろん今日言うところの「事実婚」も「結婚」である。「結婚の実体は恋愛である」(51頁)。「結婚は恋愛を前提とする」(53頁)。だから、世間体のためとか、家の格式を守るためとか、性格の改良とか、自分の社会的地位を上げるための「上昇婚」などは、正しい結婚ではない。二人の間の愛だけが結婚を成立させる。結婚が「何らかの実利的目的の企業か会社になってしまうのは」(47頁)いけない。なぜならば、愛だけが「愛自

らの中にまさに永遠性の規定を持っている」(48頁)から、「いかなる結婚も、それが結婚と呼ばれるためには「永遠なもの」が必要だから」(41頁)である。「ロマンチックな愛より一層深いエロスは人間的な実存(実人生)そのものに存する最も美しいものであるに絶対相違ないのに、悲しいかな、このエロスなしに幾多の結婚が取り結ばれている」(45頁)。では、「初恋」とは何だろうか？

>初恋は、官能性の契機、すなわち美の契機をそれ自身の中にもっている。……永遠なものがすべてそうであるように、初恋は前を向いても後ろを向いても、すなわち過去においても未来においても、永遠に初恋みずからを見ているのであり、二重性なのである。(62頁)

>幸福な人々にとっては、初恋は同時に、第二の恋、第三の恋、最後の恋、永遠の恋でもあり、不幸な人々にとっては、最初は瞬間であり、時間的なものである。前者にとって初恋はそれが現に存在するがゆえに現在のものであるが、後者にとっては、それは過去のものである」(60頁)

ここで分るように、幸福な人にとっては、初恋は「反復」であり、つねに現在であるが、初恋が終わってしまった不幸な人によっては、それは「追憶」であり過去である。

>あらゆる愛の本質は自由と必然の統一であり、そのことは初恋にも妥当する。人はまさに必然性においてこそ自己を自由と感じ、必然性において自己の完全な個性的活力を感じ、自己が自己自身あるじの主であることを感じる。(63頁)

大著『あれか、これか』は、私の持っている dtv 版の独訳で1038頁あるが、おそらくこの文章は、全体で一番大切な文章である。少し違った言い方をすればこうなるだろう、

>初恋は、自由と必然の統一である。一者は他者に不可抗力をもって牽かれるのを感じるのであるが、しかもほかならぬそのことの中にその個人の自由がある。自由は普遍的なものと特殊なものとの統一であり、それは普遍的なものを特殊なものとして、それも偶然とは紙一重の近さで特殊なものとして持っている。……このことが初恋において明瞭に現われる度合いが大きければ大きいほど、その初恋はそれだけ健康であり、それが実際に初恋であることの真実性はそれだけ大きくなる。相思相愛の二人は、逆らいがたい力でもって互いに引きつけられ、しかも彼らはそのことの中で彼らの完全な自由を楽しむ。(66頁)

初恋は、「この人」との初めての出会いであり、それはまったく偶然的である。しかし、「逆らいがたい力で互いに引きつけられる」という必然性によって、偶然は必然に転化する。この偶然が必然に転化することこそ、人間の最高の自由であり、幸福であり、この世にこれ以上美しいものは存在しない。

キルケゴールは、二人の男女が互いのエロスの美によって惹かれ、相思相愛になり、結婚に至ることを、神の恩寵であるとする。だからこそ、結婚式は教会で神父や牧師が主宰し、二人は神の前で結婚を誓う。キルケゴールは、結婚における新郎と新婦の意識の差をこう記述している。新郎は、「愛する娘を自分の力で奪取したのだと自惚れる」が(83頁)、新婦は逆に、結婚を「白馬に乗った王子様が迎えにきた」と感じるので、「私を選んでくれてありがとう」と感謝し、「男性の優越下に身を投じることは、自分を無と感じてむしろそこに喜びと幸いをおぼえる」(84頁)。つまり、新郎

は傲慢に過ぎ、新婦は謙虚に過ぎるが、どちらも間違っている。二人が互いのエロスの美に惹かれ、相思相愛になったのは、神が二人の身体をそのような美しいものに創ったからである。つまり、二人を出会わせたのは神の恩寵である。キルケゴールが、愛を、偶然と必然の統一、自由と必然性の統一と見なすのは、このような構図であるから、当然のことながら、恋愛は結婚と一体であり、恋愛＝美的な生き方は、倫理的な生き方や宗教的な生き方に昇華しなければならない。初恋における「エロスのな抱擁」の幸福は、結婚した夫婦の「エロスのな抱擁」の豊かさには及ばない。

> 君たちはエロスのな抱擁に関して多々論じるが、これを夫婦間の抱擁に並べてみたらどのようになるだろうか。夫婦間の「私の [あなた]」という呼びかけは、[初恋の恋人の] エロスのな「私の [あなた]」という呼びかけに比べて、いかに豊富なそれぞれ異なった調子を持っていることだろう。この呼びかけの響きをもって、夫婦間の「わたしの」は、たんなる瞬間の誘惑的永遠性—空想の幻覚的永遠性—ではなく、意識の永遠性—永遠性の永遠性—を満たすのである。夫婦間の「私の」には、恋人の間のそれに比べていかに強力が籠っていることであろう。意志、決断、決意がそれに緊張力を与えるのだ。(86頁)

つまり、初恋においては、二人の恋人はまだ互いに相手の他者性＝否定性を完全に克服していなかったが、結婚によってそれが克服される。初恋において二人が互いに相手のエロスの美によって、愛という受動的感情を覚えることは、たしかに「永遠の今」が現出するが、それはまだ「空想の幻覚的永遠性」である。しかし、デカルト『情念論』の愛が人を行為に導いたように、愛の感情は行為として完成する。そこには、「意志、決断、決意」が働いており、エロスの愛の感情という神の恩寵に加えて人間の「自由意志」が愛を完成させる。だからそこに現出する「永遠の今」は「真なる無限性」である。

4 恋愛は「自由な遊び」である (九鬼周造)

男爵家に生まれた九鬼周造は、『いき』の構造』を執筆したパリ留学時代、たくさんの恋をしていた。それを短歌に詠み、匿名で日本の雑誌『明星』に投稿した(死後、それらが九鬼の作であることが公表された)。たとえば、「ひと夜寝て女役者の肌にふれ^{ほりい}巴里の秋の薔薇の香を嗅ぐ」「うつくしき巴里女の手判断^{てはんだん}つつむ戀にも言ひ及ぶかな」「ドン・ジュアンの血の幾しづく身のうちに流るることを恥かしとせず」⁽⁶⁾。『いき』の構造』は日本文化論であると誤解されているが、そうではなく恋愛論であり、しかも恋愛至上主義を高らかに謳った世界的にも珍しい哲学書である。短歌で自分を「ドン・ファン」に喩えていることからそれは明らかであろう。一方、今見たようにキルケゴールは、『あれか、これか』において、「美的生き方」「倫理的生き方」「宗教的生き方」の三通りの生き方をモデル化した。そのうち「美的生き方」はドン・ファンの生き方であり、たくさんの恋愛だけをし続けて人生を全うする生き方である(結婚はしない)。倫理学者マッキンタイアによれば、「キルケゴールが『あれか、これか』で倫理的な生き方と美的な生き方とを対照的に論じたところによると、美的な生とは人間の生が一連のバラバラな現在の瞬間に解消されるような生である」⁽⁷⁾。これは非常に鋭い指摘で、このマッキンタイアの指摘は九鬼周造にこそもっともよく該当する。九鬼によれば、「いき」が意味するのは、テンションの高い恋愛関係そのものであり、結婚してしまえば男女の間に緊張がなくなり、だらけてしまう。だから、一番素晴らしい男女の関係を維持しようとするれば、結婚ではなく、恋愛だけをし続けなければならない。本来は生殖を動機づけるものであったエロスの愛を生殖(結婚)から切り離し、それだけで自立したものとして完遂

し、それでもって人生をまっとうしようというのが『「いき」の構造』の主旨である。キルケゴールの「美的生き方」と九鬼の「いき」とは、「生き方の内容」としてはほぼ一致し、どちらも恋愛に「永遠の今」の現出を見るのだが、エロスの愛としての恋愛がもつ「永遠の今」の内実が違う。つまり恋愛に含まれる「無限性」が異なる。それは「真の無限性」（キルケゴール）と「可能的な無限性」（九鬼）との違いである。両者はともに「恋愛」が「美的生き方」であるとすると、しかし「恋愛」は「倫理的生き方＝結婚」でもなければならぬと考えるキルケゴールと、その必要はなく、恋愛は究極の「自由な遊び」であると考える九鬼の差異である。以下にそれを見てみよう。

恋愛は、何よりもまず未知の相手と出会う偶然性への「驚き」から始まる。九鬼は主著『偶然性の問題』⁶⁾において、「偶然性」の根本的な意味は「出会い」にあるとしている。

>偶然性の根源的意味は、一者としての必然性に対する他者の措定ということである。……偶然性とは一者と他者の二元性のあるところに初めて存在する。……個物の起源は一者に対する他者の二元的措定に遡る。邂逅は独立なる二元の邂逅に他ならない。(277頁)

「邂逅」すなわち「出会い」とは、まったく異なる二つの因果的系列が交差することであり、それが「偶然性」に他ならない。そしてまた九鬼は、「序」で引用した西田幾多郎の「永遠の今」を念頭に、時間性と偶然性について、こう述べている、「絶対無なり永遠の今なりが、自己を限定するか、しないかに偶然性が固着している」（『人間と実存』171頁）。では、九鬼自身は「今」＝「現在」と偶然性をどのように捉えているのだろうか。

>現在において現実としての偶然を正視することが根源的一次的の原始的事実である。ついで二次的に未来への動向として未来的な可能を斜視し、過去よりの存続としての過去の必然を斜視する場合が考えられる。……正視されうる様相は一点において現在する偶然性だけにしかない。……体験の直接性にあつては、偶然は、正視態として、直態として、現在に位置をもつ限り、時間的優位を占めたものである。また瞬間としての永遠の現在の鼓動にほかならないものである。（『偶然性の問題』231頁）

ここで明らかなように、未来＝可能性、過去＝必然性であるのに対して、出会い＝邂逅の偶然性は、つねに現在であるので、「永遠の現在」たりうる資格を秘めている。そしてこの邂逅の偶然性は我々の人生において特別に重い意味を持っている。「偶然が人間の実存性にとって核心的全人格的意味をもつとき、偶然は運命と呼ばれる」（同、244頁）。つまり、「核心的全人格的意味をもつ偶然」が「運命」であり「永遠の今」である。以上が九鬼が恋愛の核心とみなした「いき」の時間性である。九鬼は『「いき」の構造』において、「いき」な恋愛の必然的な構成要素として、次の三つを挙げている。(39～51頁)

- (1) 媚態（＝自分の性的魅力を相手に示すこと）
- (2) 意気地（＝凛とした強さがあること）
- (3) 諦め（相手に執着せず、今日この恋が終っても、さっぱりとさわやかに別れること）

まとめて、「いき＝粹」とは、「垢抜けして（諦め）、張のある（意気地）、色っぽさ（媚態）」と定義される（51頁）。その三要素をさらに説明して九鬼は言う。「媚態とは、一元的の自己が自己に対

して異性を措定し、自己と異性との間に可能的関係を構成する二元的態度である。そして「いき」のうちに見られる「なまめかしさ」「つやっぱさ」「色気」などは、すべてこの二元的可能性を基礎とする緊張にほかならない (39頁)。ここで媚態とは、「自己と異性との間に可能的関係」とか「緊張」と言われていることに注意しなければならない。「現実的關係」ではなく「可能的關係」であるとは、どういうことであろうか？

>媚態の要は、距離を出来得る限り接近せしめつつ、距離の差が極限に達せざることである。可能性としての媚態は、実に動的可能性として可能である。アキレウスは「そのスラリと長い脚で」無限に亀に切迫するがよい。しかし、ゼノンの逆説を成立せしめることを忘れてはならない。けれど媚態とは、その完全なる形においては、異性間の二元的動的可能性が可能性のままに絶対化されたものでなければならない。「継続された有限性」を継続する放浪者、「悪い無限性」を喜ぶ悪性者、「無窮に」追跡して仆れないアキレウス、この種の人間だけが本当の媚態を知っている。かような媚態が「いき」の基調たる「色っぱさ」を規定している。(40頁)

この文章は、『「いき」の構造』の核心であるのみならず、愛の感情を生起する性的魅力すなわち「色っぱさ」の本性に重要な規定を与えたものである。それは絶対に到達できない「悪い無限性」であり、可能的な無限、「可能性が可能性のままに絶対化されたもの」である。この「悪い無限性」を喜ぶ悪性者だけが、自由な遊びとしての恋愛を楽しむことができる。つまり「永遠の今」がキルケゴールとは違って、「可能性が可能性のままに絶対化された」「永遠の今」なのである。これは言い換えれば、愛は究極の完全現実態になることはできない、ということである。恋愛のさ中にも、人間は自由でありたいと願う。だから、恋愛には「意気地 (=意気)」としての強さが含まれる。「いき (意気) は、媚態でありながらなお異性に対して一種の反抗を示す強みをもった意識である」(42頁)。恋愛は、相手に降参して完全に身を任せてしまうのではなく、相手に対する反抗、否定性をどこまでも秘めている。今は相手が好きでも1時間後には嫌いになるかもしれない。だから、「諦め」もまた、恋愛に不可欠の契機である。「諦めとは、運命に対する知見に基づいて執着を離脱した無関心である。「いき」は垢抜けがしていなくてはならぬ。あっさり、すっきり、潇洒たる心持でなければならぬ」(44頁)。相手から突然別れを切り出されても、狼狽したり、泣いて跪いたりしてはならない。「そうだね、残念だけど」と、あっさり、すっきり、さわやかな笑顔で別れるのが望ましい。

要するに、恋愛とは、相手の他者性・否定性がどこまでも残る中で、無限に相手に近づこうとする狂おしいまでの運動、無限に近づくけれども決して一体にはなれないが、それを知った上で自由な遊びを楽しむ人間関係である。これが最高の男女の関係であることはおそらく真であると思われるが、しかしなかなかハードルが高いことも事実であろう。

やるせなき胸の愁を何とせんタンゴにこめて君と踊らん (九鬼周造)

註

*キルケゴールのテキストは、『反復』は E.Hirsch の独訳、『あれか、これか』は H.Fauteck の独訳を参照したが、引用は優れた日本語訳である榊田啓三郎氏（デンマーク語から）と飯島宗享氏（シュレインプの独訳から）のものを用いた。下線部の強調はすべて植村のもの。

- (1) チェホフ 『三人姉妹』（小田島雄志訳、白水社1999、182頁）
- (2) 西田幾多郎 『善の研究』（岩波文庫1950、227頁）
- (3) キルケゴール 『反復』（榊田啓三郎訳、岩波文庫1956、18頁）
- (4) 岩波文庫版 『反復』 の解説、328、329頁より引用。
- (5) キルケゴール 『結婚の美的権利』（飯島宗享訳、未知谷2000、33頁）
- (6) 『九鬼周造全集』 第1巻（岩波書店1981、174～181頁）
- (7) マッキンタイア 『美徳なき時代』（篠崎栄訳、みすず書房1993、295頁）
- (8) 九鬼周造 『偶然性の問題』（原著1935、岩波文庫2012より引用）
- (9) 九鬼周造 『「いき」の構造』（原著1930、講談社学術文庫2003より引用）